

2学期の終業式を迎えました。学園祭、瀬摩高フェア、進路選択、課題研究…どのように皆さんの記憶に残るでしょうか。人権に関する学習も、この便りでぜひ振り返ってみてください。

◎1年生「よりよいコミュニケーションを考える」

1年生は、11月にアサーティブ・コミュニケーションについて学習しました。コミュニケーションの3つの型を知り、どうすれば自分も相手も尊重できる表現が出来るか考えました。

<コミュニケーションの3つのタイプ>

- ①**攻撃的な自己表現**：相手をおさえて自分の言いたいことを通す。自分が優位に立つために相手をコントロールし、ねじ伏せようとする。【攻撃型・決裂型】
- ②**非主張的な自己表現**：自分をおさえて相手を立てる。言いたいことを率直に言うことができないためストレスを感じる人が多い。【しぶしぶ型】
- ③**アサーティブな自己表現**：お互いの主張や立場を大切にしたい表現をすること。自分が感じたこと、思っていることを、率直に、正直に、相手や自分を責めること無く伝える表現。【円満型・非攻撃型】

アサーティブ・コミュニケーションにおいて、「互いの主張や立場を大切にする」というのは、必ずしも「相手と仲良くする」というものではありません。問題が起きたときに、誰かを責めることなく問題を解決に近づけ、状況をよりよくする、そのために対話をすることを意味します。



<アサーティブ・コミュニケーションで大切なこと>

- 考えや意見、価値観が違っていても、互いを尊重し、互いの信頼をもとに、建設的な（ものごとを良くしようとするための）議論ができる。
- お互いが正直に、率直に、そんたく「忖度せず」に伝え合う。（そんたく「忖度」…他人の心の中をおしはかること）
- 違いがあったとしても、対等な姿勢で対話ができる。

授業では、クラスでのめめごとに対して、どのように発言するのが良いか、それぞれの立場でロールプレイをしてもらいました。アサーティブな自己表現は、トレーニングをすることで身に付けていくことができると言います。意識して実践を繰り返してみてください。

感想より

- ☞ 攻撃的な言い方だと相手がいしやく「萎縮」したり、よけいに怒ったりするかもしれないけど、円満型の言い方だと相手も言いたいことを理解して自分が悪いことをしたとわかって、これから直していこうと前向きになると思いました。
- ☞ 自分はよくチームがまとまらないときに、怒ってしまうことがあります。今回の学習活動を振り返ってみて、怒らず、相手を嫌な気持ちにさせず、しっかり考えて注意などしていこうと思いました。

◎2年生「部落差別の歴史と現実から学ぶ②水平社宣言」

2年生は【水平社宣言】をテーマに学習しました。当時、差別されていた人々が立ち上がって「人間の尊厳と平等」を求めたこの宣言を読み解いていきました。

水平社宣言が出される前、都道府県などでは、差別されていた人々に対してその生活を改善させようと取り組んでいました。しかし、そうした政策はいずれも「差別される側」に責任があり、『差別される側』が変われば差別はなくなる」という誤った考えにもとづいていたと指摘されています。それが、「差別されても仕方がない」とでも言うような、「差別する側」の人々の誤った見方を強くしていったとも言われます。



(『水平社宣言』水平社博物館ウェブサイトより)

授業で確認した通り、差別は、「される側」に原因や責任があるのではなく、「する側」に原因や責任があって生じるものです。また、「差別される側」を憐れんだり、同情したり、差別する側が優位な立場にあるかのような姿勢では差別は解消されることはありません。差別されてきた人々は、「憐れみ」でも「同情」でもなく、「同じ人間として平等に接し、人間の尊厳を守ること」を求めたのです。

感想より

- いじめをしている側や差別をしている側に問題があるのは確かだと感じました。自分のしていることが本当に正しいのか、考える必要があると思います。まだこの世界に差別はあると思うので、一人一人が考えて行動し、無くしていきたいです。
- 人権の授業はけっこう受けてきたけれど、また新たなことを知ることができたので良かったと思います。人を大切にすることや、人を尊敬するための授業だと思い、日々の生活の中で、人を大切にしたり人に感謝しながら過ごせていけたらと思いました。

今年水平社宣言から100年という節目の年です。今、私たちは、どのような立場の人であっても、「相手に対して敬意を持って接すること」が出来ているでしょうか。敬意を持って相手の声に耳を傾けているでしょうか。水平社宣言の意味を、今一度「自分ごと」にしてみたいと思います。

<人権教育推進委員の先生からメッセージをもらいました！>

◆教務部長：加藤先生より

マスク越しでのコミュニケーションが日常となり3年が経とうとしています。表情が見えない(出せない)中で、人と関わることで自体に不安感や疲労感を抱くことが増えていませんか。だからこそ、朝の挨拶や廊下ですれ違う時の言葉かけ(小さな関わり)を大切にしていきたいですね。

◆図書情報研修部長：吉田先生より

よく知らない他の人に対して私たちは不安に感じることもあるかもしれませんが、しかし、実際に話してみると不安を感じるほどでもなかった、という経験はありませんか？できる限り対面で接することで人間関係を築いたり、深めたりすることが簡単になることは想像ができますよね？我々の文化の象徴でもある「言葉」。武器にせず、交流の道具として使いたいですね。